

上新電機オーディオ試聴会 (2017.6.25)

—ソウルノート試聴会—

1. はじめに

上新電機日本橋1番館で開催されたソウルノートの試聴会に行ってきました。新製品のDAコンバーターD-1をPMC Twenty 5シリーズのスピーカーで聴くという試みです。

2. 使用機器

ソウルノート DAコンバーターD-1



http://www.kcsr.co.jp/detail_d1.html

現在使用中のSonicaと同じく、ESS社の32bitDACチップESS9038PROを使用しています。

PMC Twenty 5シリーズのスピーカー

http://www.kcsr.co.jp/detail_twenty5_23.html



当日のセッティング

3. 試聴会の進行

最初にソウルノート創設に至る経過と開発コンセプトやその手法についての説明が

ありました。試聴のラインアップは、デジタルプレイヤーC-1（トランスポート）→DAコンバーターD-1→プリメインアンプA-1→スピーカーPMC Twenty5 (22)で、C-1はプレイヤーとしての接続も行われ、また、iPadからUSB経由でD-1への入力も行われました。

D1についてはESS9038Proが使用されていますが、この採用については、電流増幅であること、その出力が120mAと大きいこと、抵抗によるI/V変換が可能なことがその理由とされています。

最初にベースと女性ボーカルの掛け合いとギターデュオのライブ録音CDがかかりましたが、切れ味がよく、生々しいスピード感のある音がしていました。特にベースの躍動感や伸びやかさはPMC Twenty5のトランスミッションラインの効果と思われまます。

ここで実験と称して、D-1のトップカバーにタオルを置く再生がありましたが、有り無しでは無しの方が響きに乗ってくる印象です。なお、トップカバーはベコベコの薄い天板のようです。

次の実験は100KHzのフィルターのON/OFFで、ONにすると倍音の伸びが低下する印象です。

ついで、女性ボーカルがかかりましたが、生々しい印象は先の音源と同様で、どうやらソウルノートの開発スタンスは、無帰還で、共振を抑え込むとか、フィルターをかけるとかしない方針で音作りを進めているようでした。

次にC1をプレイヤーとして使用し、女性ボーカルでC1内蔵DACの音とD1経由の音の比較がありましたが、後者の方の鮮度感が高いように感じました。

また、D1はロックレンジの切り替えが可能で、標準のレンジ3とクロックのロックの幅を狭めたレンジ1との比較がありましたが、レンジ1の方が緻密で焦点のあった音のように感じました。このレンジ幅は時間軸の精度に関係しているようです。

D1はトランスの直下にメカニカルアースによりスパイクで受けていますが、その効果を聴くために、インシュレーターをかませてスパイクを浮かせて聴きましたが、やはりスパイク受けの方が滲みの少ない音でした。

ここでクラシックはどうかということで、ムローバ／小澤／ボストンのチャイコフスキーのV協がかかりましたが、解像度は良いものの、先のオンマイクのジャズやボーカル、ギターなどとはちがって、一挙にクールでよそよそしい音になってしましますし、ムローバのストラディバリウスの味わいも不満が残りました。

次にD1のUSB入力の音を聴いてみることになり、iPadからUSB変換コネクタ経由でD1のUSB入力とし、ONKYOのPlayerによる再生で男性ボーカルとジャズがかかりましたが、C1の場合と同様、鮮度感のある音がしていました。さらに幻想の96KHz24bit音源がかかりましたが、先のチャイコフスキーのV協と同様、フルオーケストラの迫力や平面的になってしまい、音場感に不満が残りました。

最後は、USB 入力で、男声ボーカル、ギター、男声ボーカル、ジャズと続きましたが、いずれも解放感のある、切れ味の良い音がしていました。

なお、この試聴会に先立って河口無線に行ったところ、アキュフェーズの最上級クラスの機器（DP-950/DC-950/C-2850/A-250×2）で B&W 802D3 が鳴らされていました。これも上質の良い音でしたが、本試聴会のソウルノートのシステムの方が、リアリティの高い音のように感じました。



4. まとめ

ソウルノートの機器は、いずれも開発スタンスが明確で、音楽ジャンルを限れば、非常に鮮度感があり、ハイエンド機器を凌駕するパフォーマンスを示してくれています。また、ロックレンジの切り替え機能も斬新なアイデアです。しかしながら、クラシックになると、その利点が出てこないのが不思議で、恐らく開発時点での評価にそういった音源を使用する機会が少ないのではないかと思います。

以上